

こども未来会議（第13回）議事録
12月20日（金）11時00分から12時00分まで

【小松部長】

はい、それではただいまより、こども未来会議第13回会議を開会させていただきます。本日はご多用の中ご参加をいただきまして誠にありがとうございます。会議の事務局を担当させていただきます、東京都子供政策連携室企画調整部長の小松と申します。

こども未来会議はこの度委員の改選を行いました。座長が選任されるまでの間、進行役を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。早速ではございますが、議事に入らせていただきます。

初めに委員の皆様をご紹介します。

学習院大学文学部教授、東京大学名誉教授、秋田喜代美様。

【秋田委員】

秋田でございます、よろしくお願いいたします。

【小松部長】

株式会社日本総合研究所調査部上席主任研究員、池本美香様。

【池本委員】

よろしくお願いいたします。

【小松部長】

国連子どもの権利委員会委員、弁護士、大谷美紀子様。

東京学芸大学理事、神戸親和大学学長、松田恵示様。

【松田委員】

よろしくお願いいたします。おはようございます。

【小松部長】

今回新しくメンバーに加わっていただきました委員の皆様をご紹介します。一言ご挨拶をお願いできればという風に思います。

芸人・プロデューサー、古坂大魔王様。

【古坂委員】

よろしくお願いいたします。子供の活動には凄く興味がありまして、名前が「大魔王」と言い

ますが、これは本名ではございませんので、子供に大きな魔王なんだと言われてはね。安心してください。よろしくお願いいたします。

【小松部長】

ありがとうございます。一般社団法人たすけあい代表理事、田中れいか様。

【田中委員】

田中れいかと申します。私自身は東京都内の児童養護施設で7歳から18歳まで生活をしてきた経験があります。その経験を基に、施設等で暮らすお子さんたちの声を届けるということで、こども家庭庁の審議会等で参画をさせていただいております。よろしくお願いいたします。

【小松部長】

ありがとうございます。認定特定非営利活動法人カタリバ、文京区青少年プラザ b-lab (ビーラボ) 館長、山本晃史様。

【山本委員】

はい、よろしくお願いいたします。カタリバという NPO はですね、子供の貧困というテーマ、不登校から探究とか、学校作りなどの様々なテーマで活動している NPO になっておりまして、私はその中でも文京区青少年プラザ b-lab という、中高生が学校が終わった後に、皆が訪れてですね、自分のやりたいことを色々チャレンジしたり、居心地の良い場所として過ごすってところの責任者をやっております。日々毎日中高生と会っているので、それらの声もぜひ届けられたらと思っております、よろしくお願いいたします。

【小松部長】

ありがとうございます。また、本日はプレゼンターの方にもご参加をいただいておりますのでご紹介をさせていただきます。東京都医学総合研究所社会健康医学研究センター長、西田淳志様でございます。

【西田プレゼンター】

東京都医学総合研究所の西田と申します。よろしくお願いいたします。

【小松部長】

それでは開会にあたりまして小池知事よりご挨拶をお願いいたします

【小池知事】

皆さま、おはようございます。こども未来会議、今日で第13回となります。新たに3名の方、委員に加わっていただきました。お引き受けいただきましたこと、まずは御礼を申し上げます。どうぞよろしく願いを申し上げます。

13回目のテーマでございますが、「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」ということでございます。私共は常々、「子供というのは社会の宝だ、宝物だと、そしてその笑顔は未来への希望だ」ということを申し上げて、そしてチルドレンファースト社会の実現に取り組んできたところでございます。

一方で、いじめ、そしてまた不登校が大変増えているということ、子供が生き生きと毎日を送る環境を整えることが重要であるわけでございますけれども、こういった現実も一方で存在しているということでございます。ぜひとも、子供たちの笑顔を守るという、そのために、起こった後の対策ではなく、未然にいかにして防いでいくか、そういった観点での政策が必要だと、また展開していかなければいけないと考えております。

さらに海外でも色んな研究が行われておまして、居心地の良い学校環境では、生徒のメンタルヘルスの問題は生じにくいと、そして抑うつといったようなこと、またいじめ等少ないという報告もされております。そもそもいじめという言葉がない、というケースもあるわけでございます。色んな研究成果がございますので、都として、西田先生ご紹介させていただきましたけれども、東京都医学総合研究所、こちらの方で連携しまして、学校の居心地をより良くしようというプロジェクトを今年度から開始をしているところでございます。

今回は、その東京都医学総合研究所の社会健康医学研究センター長を務めておられます西田 淳志先生に、取組の概要をお話しいただくということでございます。ちなみに西田先生はずっと、コロナの際も、毎週のように、会議で色んな影響、社会的影響なども分析してくださって、戦う仲間だったですね、あの頃ね。

ということでございますが、いずれにしましても、本日のこども未来会議、子供たちの健やかな成長のために、委員の皆様方のお力添え、ぜひともよろしく願い申し上げます、これまでの都の様々な政策をさらに磨きをかけていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願い申し上げます。冒頭のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

【小松部長】

ありがとうございました。続きまして、会議の座長の選任を行いたいと思います。座長につきましては、皆様方に事前にご相談をさせていただきました通り、学習院大学文学部教授、東京大学名誉教授の秋田喜代美様をお願いしたいと思いますが、皆様ご異存はございませんでしょうか？

はい、ありがとうございます。それでは秋田様に座長をお願いしたいと思います。秋田座長、ご挨拶と今後の会議の進行につきまして、よろしく願いいたします。

【秋田座長】

はい。皆様、選任いただきました、秋田でございます。どうぞよろしく願いをいたします。第1回からこちらに参加させていただいておりますが、小池知事のリーダーシップの下で、チルドレンファーストということ具体的にどのように様々な年齢の子供たちに実現していくのかということの方向をここで語らせていただきました。今後も、ぜひとも国もそうすけれども、一歩先ゆく東京都ということで、子供のためのあり方を皆様と一緒に考えてまいりたいと思います。どうぞよろしく願いをいたします。

それではですね、今日はこの進行の方を続いて私の方でさせていただきます。本日のテーマは、今小池知事からご紹介ありましたように「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」でございます。それではプレゼンターによる発表の方に移りたいと思いますので、プレゼンテーションをいただいた後に意見交換をさせていただきます。それでは西田様、15分程度という短い時間でございますが、プレゼンテーションをよろしく願いいたします。

【西田プレゼンター】

はい。本日はこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。東京都医学総合研究所の西田と申します。本日は「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」についてお話をさせていただきます。

さて、うつ病を初めとするメンタルヘルスの問題は過去10年の間で、若年層で急激に増加しており、特に先進諸国でその傾向が顕著であるということが多くの研究によって明らかとなっています。そうした中で、若者のメンタルヘルスの危機に立ち向かうための戦略、科学的根拠に基づく戦略というものがグローバルに求められている状況でございます。若者のメンタルヘルスにつきましては、既に様々な取組がなされてまいりましたが、その多くが、問題が発生し悪化した後にですね、専門家が登場して、個別の支援をするというものでございました。いわば問題発生後の下流での対応です。

一方、若者に限らず、人間のメンタルヘルスというものは日々暮らしている環境の影響を強く受けます。特に家庭や学校など、人間の集団が紡ぎ出す雰囲気や文化、風土というものがメンタルヘルスに極めて大きな影響を与えています。近年、学校の風土、学校の居心地を改善する取組によって、若者のメンタルヘルスの問題やいじめ、また校内の暴力などを未然に防止することができるということが明らかとなり、学校風土を標的、ターゲットとした予防的な介入の重要性が国際的にも広く認識されるようになっております。

ちなみに、学校風土というものは測定できるものでございまして、私共は国際的に使用している尺度の日本語版等を開発し、既に実践や研究において使用しております。学校風土、学校の居心地というものは四つの要素から構成されておまして、一つ目は先生と生徒との信頼関係、二つ目は生徒同士がお互いを尊重して安心して学校にいられるというような状況、三つ目は学校風土、学校をより良く改善するための取組に生徒が積極的に関与できるということ、四つ目は、将来を見据えて勉強などに熱中、打ち込むことができることという

ことであります。こうした四つの要素がしっかりと整っている学校は、学校風土が良い、居心地の良い学校ということになります。

実際ですね、居心地の良い学校に通っていた子供たちは、コロナ禍であっても、良好なメンタルヘルスを維持出来ていたということが、私達の研究ですね、都内在住 3000 人のお子さんたちを 10 年近く追跡させていただいているコホート研究というものですけれども、そういった研究によっても明らかになっております。また、東京都の子供政策連携室が実施されておられます、「とうきょうこどもアンケート」においても、学校の居心地が子供の幸福度と強く関連する要因であるということが示されています。

さて、WHO やユニセフなどの国際機関は、以前から健康増進する学校ですね、Health promoting schools というコンセプトを提唱しまして、その中で肯定的な学校風土を作り出すことの重要性を強調してまいりました。近年になって、ハーバード大学のビクラム・パテル教授らのチームによって、肯定的な学校風土を作り出す具体的な方法が開発され、その効果の大きさが国際的にも話題となっています。学校の外からですね、居心地向上をミッションとするコーディネーター、教師以外の大人を投入したことが大きな成功要因だというふうに言われています。

さて、ビクラム・パテル先生は若者のメンタルヘルスの研究領域で世界的な権威でございますけれども、世界三大医学賞であるガードナー賞を近年受賞され、また TIME 誌の世界で最も影響力のある 100 人にも選ばれている方です。本日はパテル教授からもビデオメッセージをいただいておりますので、そちらを共有させていただければと存じます。動画の方よろしく願います。

(動画視聴)

今のパテル教授もですね、学校の居心地を向上させるためには教員と生徒の信頼関係はもとより、生徒同士の繋がりや関係をより良くしていくことの重要性を強調しておられます。また、生徒が学校の運営に積極的に主体的に関われること、すなわち Agency を発揮できる機会を校内で増やしていくことが、とても大事であるとおっしゃっています。こうしたことを実現していくためには、教職員の先生方だけでなく、学校の外から新たな人材を投入し、生徒たちとの共同創造を促進する仕組みを作り出すことがポイントになります。

具体的には、まず学校の中で居心地を良くしていくためのチームを作ります。学校の居心地を良くするためのプロジェクトに参加したい生徒を募集し、生徒のコアチームを作り、そしてコーディネーターと生徒たちとで居心地改善のアイデアを出し合い、議論をし、提案をまとめます。その提案については先生たちのコアチームとも議論を重ね、実現に向けてアクションプランを作り、関係者が協力して実行に移していきます。こうした取組を継続する中で、より多くの生徒たち、また先生たちを巻き込み、学校全体の Agency を高めていくということがポイントになります。コーディネーターの重要な役割は、生徒の意見表明を支援しつつ、教職員とも連携をし、生徒同士の共同創造、また先生と生徒たちとの共同創造を促進するということになるかと思えます。

さて、この居心地向上のプロジェクトが上手くいった学校では、いわゆるですね、意見箱にとっても沢山意見が入るようになるそうです。学校の外からコーディネーターが入り、その人が意見箱を開くようになると、沢山の意見が入るようになります。一方で、外部から人を入れず、先生たちだけで対応した場合は、なかなか意見箱に意見が入らないということが起こるようで、学校の居心地もそうなりますと、なかなか向上していくことが難しいということも分かっております。

さて、私達東京都医学総合研究所は、昨年度、2024年1月に東京都と協定を締結させていただき、この学校の居心地向上検証プロジェクトというものを開始しております。今年度は都立の学校2校とパイロットプロジェクトを進めさせていただいております。今年の3月には、先ほどのパテル教授にも来日していただき、モデル校での打ち合わせやワークショップにご協力をいただきました。現在モデル校にコーディネーターが入り、生徒たちのコアチームと議論を重ねながら、居心地向上に向けたアクションプランを検討中であります。

最後ですけれども、今後の展開ですが、モデル校での実践を踏まえて、東京都の学校、東京都の生徒たちにフィットした居心地向上プログラム、すなわち東京モデルを開発するとともに、この活動のキーとなるコーディネーターの養成プログラムをしっかりと構築していきます。また、こうした取組の効果を科学的に検証した上で、エビデンスに基づいた東京モデルを広めていければと考えております。こうした取組が仮に成功し、都内に普及していくことが叶えば、通いたい、通い続けたいと生徒さんたちが思う魅力的な学校がさらに増え、結果的に不登校なども少なくなっていくのではないかと思いますのと、さらに思春期に培った Agency や人間関係を基盤に、若者が元気で活躍する社会の実現に繋がればと期待しております。

私の方からは以上でございます。

【秋田座長】

西田様、プレゼンテーションをどうもありがとうございました。それではここから意見交換に入りたいと思います。本日のテーマであります「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」についてプレゼンテーションも踏まえ、それぞれのお立場からお話をいただければと思います。

まずは、各委員から順番にお一人2分を目安にご発言をいただきたいと思いますので、それでは恐縮でございますが、五十音順ということで、池本委員からお願いをいたします。

【池本委員】

はい、ありがとうございます。最初に質問で、この今プロジェクトされているのが、学校というのが、都立の学校とか年齢とか、もう少しご説明いただきたいなと思ったのがまず一つです。私の方では今プレゼンテーションを拝見して、改善に関与できるとか主体感ってところが、一つの要素として入っているんだなということが凄く気づきというかですね。た

だ整えてあげることが子供にとっていいわけじゃなくて、子供たちがそこに関われるってことを保障することが、凄く居心地に重要なんだなってことが分かりました。そしてそれがまだ、先ほどちょっとグラフの中で伸びしろがあるっていうことで、そこが今やっぱり一番足りていないところなんだなっていうことを感じました。そのことで今ちょうど私もそういった子供の学校での意見表明についての歴史みたいなことをちょっと調べているところだったんですけども、実は、古い時代はむしろもっと参加して、自治をやっていたところが、ある時からそういうものが抑えられてきて、今はもうそれが当たり前の世界に20年30年なってしまっていて、それが何かメンタルヘルスにも関係してるのかなとちょうど思っていたところでした。なので、そういった何か学校の考え方を、まずその通知とかそういうものも変えていく、指導要領とかそういうところも変えていきながら、また現場でそういう具体的な実践をどんどん広げていくっていうことが、重要なことだというふうに思いました。不登校なんかも調べていて、もの凄いで増えていてですね、放課後の居場所のことも調べている中で、放課後の居場所に午前中から小学校低学年の不登校のお子さんが来てるっていうような、もうそんな現状が現場では起きているところでした、その辺の現場のスピードに合わせて、ここも相当スピードアップしてやれたらいいなと思います、ありがとうございました。

【秋田座長】

ありがとうございます。それでは続きまして、大谷委員お願いいたします。

【大谷委員】

ありがとうございます。私は感想とあと質問がちょっと一点あるんですが、まず感想としまして、「学校の居心地と生徒のメンタルヘルス」という今日のテーマなんですけれども、メンタルヘルスということを通じて子供の問題として取り上げられるようになってきたということが本当に素晴らしいと思う、やっぱりまだまだスティグマがあるといいますかメンタルヘルスの問題を扱うことに対する社会の意識がですね、何となくこう話しにくいということがこれまではあったんじゃないかなと思ってんですが、普通に本当に子供さんの大事な問題として国連の子どもの権利委員会でも常にメンタルヘルスの問題を重視していますので、それが一点です。

そして今日のご報告を聞いていて、子どもの権利条約の観点から見て、大変重要なことが沢山含まれているなという風に感じました。特に、学校で生徒が積極的に関与できるという、赤で特に強調されていましたし、さっきの伸びしろのところでも、あとまた生徒の意見表明という言葉でご表現されていた、これまさに子どもの権利条約十二条の子どもが意見を聞かれる権利の、まさに実践というか、この取組の中に要素としてきちっと入っている、今日ちょっとこの会議の前にも少し委員の間で雑談していたときにも、子供の人権教育って、何か子どもの権利条約はこういうものです、とか教えるっていうそうじゃなくて、この学校生

活の中で、それがどう具体的に本当に実践として入ってくるのかってところが大事だと思うんですけども、その意味で、特にこの今日のご報告の中で子どもの権利条約とか子供の人権とかいう言葉が使われてたわけではないんですけども、やってらっしゃることにはそれが入っている、そこをまたきっかけに学校の中で子供、生徒たち、それから先生たち、皆さんがこれは実は子供の権利の話なんだと、条約の実践にもなってるんだってということをどう繋げていけたらいいかなということを感じました。

あと教員と生徒で対等にチームを作ってらっしゃるとか、ピアツーピアのところを重視されているというところが非常に重要だと思いますし、また Agency というかエンパワーというところを重視されていることに非常に感銘を受けました。

質問二点ありまして、一つは学校では、日本の学校でやっぱり校則っていうのがすごく大きな問題だと思うんですが、そういうところは今後取組の中で、あるいは今までのプロジェクトの中で、話として出てきているんでしょうかということが一点です。もう一つは先ほどパテル教授のお話の中でも、アドレセンス、思春期って話が出てきたんですが、国連の子どもの権利委員会では思春期を一応 10 歳からっていう風に考えてやっています。その意味で、今後そのパイロットで小学校っていうのはテーマ、対象になるんでしょうかというのが質問です。ありがとうございます。

【秋田座長】

ありがとうございます。それでは続きまして、古坂様お願いします。

【古坂委員】

よろしくお願いします。こういうこども未来会議っていうのに、僕きっと 7 年ぐらい前だったら、そんなに興味がなかったかもしれません。うち子供が 6 歳 4 歳でして、毎日保育園に送り迎えとかもやっているんですけども、なんかうちの子供からすると、うちの子供の未来の話なんです。だからそういう意味では、正直言うとまだ、実感できてない部分であるんですが、自分の 40 年ぐらい前の記憶と今リアルタイムの保育園の記憶から混ぜていくと、僕やっぱり凄く重要だなと思うのは、大人が目を向けるってことかなという風に凄く思ったんですね。そういうのを学校とかでやっぱり大人がきっちり目を向けた方がいいんじゃないかとはいうものの、実はうちの弟が大学の講師でして、大学の中ではそこ難しい問題がある。よくインターネットでは、いじめがあった場合には警察入れよ、弁護士がいけばいいんじゃないかとかっていう極論がすごく飛び交う中で、何か良い方法はないのかな、でも先生にこれ以上負担はもう、弟からも聞いていますし、僕厳しいなっていうときに、このコーディネーターという言葉が僕は凄く今もうわーっと思ひまして、こういう言葉ってもちろん知事が色々と言葉を沢山今回のチルドレンファーストもそうですし、クールビズとか 3 密とかも含めて、やっぱ言葉って凄く強いと僕は思ひまして、このコーディネーターというワードが新しく、しかもかっこよくて、このかっこいいってのが重要で、学校にかっこいい

コーディネーター来るってやっぱりいいなっていう、やっぱり子供たちはかっこいいに敏感ですから、うちの子供たちはかわいいに敏感ですけど、やっぱりそういう子供たちの納得感がないとうまくいかないと僕は思うんですね。あくまでも子供のためであって、子供が主体なんで。子供たちが「コーディネーターの人が来た、わーい、楽しくやろうぜ」っていうことが、実は良き、良かれ、ウェルビーイング、日本語難しいんですけど、良かれ、良きっていう感じになっていく気がしたので、実は僕 avex class という各学校色々回って講演会してるんですが、小中高いっぱい回ってるんですけど、その中で 1 校だけコーディネーターが入ってる学校があったんですね。そのコーディネーターが昼の放送を担当していたんです。昼の放送がもう地方 FM みたいに、「何とかさんがこうこうこうで…今週のリクエストです」つってその子供のリクエストを流してクラスが盛り上がりつつあるっていう。そうするとさっき言ったみたいに、あのパーソナリティだったら言えるかもっていう、なんか地元の DJ みたいな雰囲気になっていくっていうのが凄くいいなと思ったので、このコーディネーターというワード、僕が出来ることは沢山喋っていっぱい広めてって、現場とラジオとかテレビとかでコメントしていくっていうことが凄く重要ななという風に思いながら聞いていたので、頑張ります。

【秋田座長】

ありがとうございます。それでは田中様、お願いします。

【田中委員】

はい。私自身初めてこの「学校の居心地向上」っていう言葉を聞いたので、そういった観点ももう世界では進んでいるということにまず驚きました。東京都内では虐待を受けているお子さんというのが、児童相談所の相談件数でいうと 2.7 万件と多くなっています。そういった中で、そういったお子さんたちもこういったコーディネーターの存在によって、自分自身の家庭の異変だとか、ちょっと自分の状況っておかしいんじゃないかって、そういうことを伝える存在にもなりうるかなと思って非常に明るい希望を感じました。

意見としましては、先ほど古坂さんからもありましたが、言えるかもっていう大人をどう養成していくかっていうのがポイントだと思っています。この私が関わっている分野の中では、子供の声というのは、ドアノブが子供の内側にあって外からは開かないっていうようなそういう表現があるんですけども、子供自身が開けてもいいかなって思える、そのコーディネーターの養成をどうされるかは非常に気になっているところです。

最後、質問としましては、意見箱の内容、どんなものが集まったのか、ぜひいくつか聞かせていただけたらと思います。以上です。

【秋田座長】

ありがとうございます。それでは松田様、お願いします。

【松田委員】

はい。ありがとうございます。何か意見とか質問が取り混ざったようなことで2点。

一つは、本当に心地良さって大事だなと思っていて、夏にこういうファン（注 扇風機）で若い方はよくこうなさいますね、あれは僕はあれを持っていくこと自体が、なんかもう手間に感じて、つまり、なんかやっぱり今の若い方の心地良さっていうのを自分はいくらも分かってないんだろうなって思ったりしたんです。そういうことでその心地良さっていうのがやっぱり多分感じ方がもう色々な人で色々で、そういうことが何か皆でシェアできるもいいなと思って。そんなようなことは、この取組の中で、例えばどんなふうに見える可能性がもしあったりするのだったら教えていただきたいなと思いました。

もう一つは本当に参加していくって本当に大事なことだなと思っていて Agency という言葉がありましたけど、主体的にっていう何か同じような言葉での Subject って主体性って言いますよね。なんでいつも Agency って皆最近言うのかな、なんていうことをよく考えてたんですけど、多分なんかそういう楽しい場所とか色々な参加をして、凄く自分が元気になって周りも変わっていったっていうときに、周りも変わってるんだけど、その周りが変わったことから自分も変わるみたいな感覚をちょっと持ってるのかなと、その意味では何か我を忘れるって、我を大事にするという意味では変なんですけど、でも Agency を高めるためには重要な何か要素だなと思っていて、その意味で何か私が変わっていくってようなことっていうのも、何かこの中で見て取れるですね、内容があるのかどうかみたいなことを教えていただけたらと思いました。以上です。

【秋田座長】

ありがとうございます。それでは山本様、お願いします。

【山本委員】

はい、ありがとうございます。このテーマについてとてもですね、喋りたいことが沢山ありまして、実は私もまさにこの校内プロジェクトのような形のことをですね、5年間ずっとやってまして、コーディネーターとしても結構学校に入らせていただいていたっていうのがあるんですけど、元々私的には中高生のときに放課後とか余暇とか、市民性っていうのに興味あったんですけど、元々スウェーデンとかフィンランドとかそっちの国を見ていた中で、学校の中における学校の参加、参画ってものがとても進んでいるので、それが日本の中でどうやったら実現できるのかな、学校民主主義ってどうやったらできるのかなって考えたときに、まさに校則っていうものがトピックになっていたんで、校則を切り口に、校則だったら子供たちにとって凄く身近だし、題材になるので、それを一方的に先生が変えるのではなくて生徒の皆さんと一緒に、あるいは地域の方とか保護者の皆さんも対話に巻き込み

ながら、どうやってより良いものに作っていくのかなってことをルールメイキングってちょっと名前をつけまして、2019年から取り組んでいたんで、今ですね、小学校から高校まで450校ほど一緒にやれてたりするので、何かこれを進める上では、何か色々お手伝いできることがあるなと思っていましたので、これを進めること自体は凄く大事だなと思っていました。

その上でちょっと観点的に、何かプラスでやった上での大事だなと思うところだと、一つは例えば、やっぱどうしてもこの校内プロジェクトを進めていると、手挙げてくれる子とか学校に来てる子たちに視線はいくかなと思うんですけど、やっぱり学校の居心地の良さを考えると、ちょっと学校に行けてない子だったりとか、学校に馴染めてない子も含めた居心地の良さとか、あの環境改善ってものが凄く大事になるかなってのは思っているところですね。あと今、学校外の立場にいるので、何か学校というものだけに完結しすぎない視点もやっぱ大事なかなと思うので、なんか学校の中の居心地の良さだけど、学校外にも違う関係性があったりとか、居心地が良いと思える場所があるっていうのは大事だと思うので、その考える上でその色々な支える場所があるのは大事なかなと思っていたりしてます。

あとコーディネーターは、やっぱいることが大事だなと思っているので、我々のような第三者のような私が入っていくケースもあれば、ちょっとまだこれは仮説なんですけど、何か例えば他校の先生が他の学校に行って、やってみるみたいなことも先生の越境にもなって、先生の何か、先生自体は子供たちと関わる専門性がかなり高いなという風に学校現場入って思ってるんですけど、やっぱ自分の学校になるとちょっと視線が変わったりとかするとき、他校に行ってみることで元々持ってる先生の専門性が生かされるみたいなことはもしかしてあるのかなとか思ったりしているんで、何かそういう意欲のある先生が他の学校に行って、なんか校内プロジェクトのコーディネーターとして動くみたいなのもありうるかなとかも頭では考えていたみたいなことありました。一旦以上です。

【秋田座長】

ありがとうございます。今のプレゼンテーションや皆様のご発言を聞かれて、小池知事の方で何かございましたらお願いします。

【小池知事】

はい、まず西田先生ありがとうございます。そしてハーバード大学のパテル教授からも心強いメッセージをいただいたところでございます。学校の居心地を高めることによって、いじめを未然防止する、またメンタルヘルスが増進するなど、様々な効果をもたらす可能性があるという内容だったかと思います。

一方でエージェンシーという言葉がここへ出ているんですが、なかなか主体性、主体感という日本語訳がついているんですが、何かもう少し何て言うんですかね、すっとんと落ちるような言葉、コーディネーターというのは分かるのですが、エージェンシーというとはトラベル

エージェンシーとかですね、国の機関名だったり、ちょっと違うと思うけど。それで、この辺り何か少し工夫した方が伝わりやすいなというふうに思いました。

それからあと今不登校が増えているというのが、ちょっとものすごいスピードで特にコロナ後が、その前もありましたけれども、少し数字がコロナ前と違いすぎて、それも小学校一年生から不登校っていう、その子の人生は何だろう、義務教育ってなんだろうと色々考えるところなんですね。これからのその学校のあり方そのものが今問われているところもありますし、ちょっと言葉の整理などしながら進めていく必要があるかなと、このように思っております。学校風土の改善といった新たな視点での取組を進めていきたいと、このように思いました。

皆さん、ご発言、誠にありがとうございます。

【秋田座長】

ありがとうございます。それではプレゼンテーションしてくださいました西田様の方に今の皆様のご意見や知事のご意見を聞いて、ご質問もございましたので、含めてお話をいただけたいと思います。

【西田プレゼンター】

ありがとうございます。様々な貴重なコメントをいただきまして、ありがとうございます。この取組でやはり重要なのは、知事のお話にもありました Agency ということをはいかに育んでいけるかということなのですが、これまでどうしてもこういう言葉が出てくると子供の中にある心理的な能力みたいな、答えの中にある能力のように捉えられがちなのですが、これは実は環境が引き出すもので、OECD の 2030 年までの教育指針という秋田先生もリーダーシップ取られていますけれども、OECD が 2030 年に目指す世界の教育のあり方の中で最も大事なのが Agency であるという風に言っているのと、それから Co-agency という言葉も OECD は使っていて、それはやはりその答えの中にあるんじゃないかと、お互いの関係の中で創発される、そういう主体性というそういう定義がなされています。主体性でいいのかどうかもちょっとこれは要検討ですけども、そういった OECD も含めて、今後の教育の一番重要なポイントは一つそこにあるだろうと。それをしっかりと学校の中で育めるような仕組みを作っていこうと、このプロジェクトもまさにその一環だという風に思っております。

それで沢山ご質問もいただきましたので、可能な限りお答えさせていただければと思うのですが、まずそうですね、この取組は思春期のお子さんたちの発達の特徴を踏まえながら設計されているものでございまして、主に中高生を対象にしております。ただ先ほど、往來ですね、小学校でも必要なのではないかというご指摘いただいております、それも非常に重要な課題だという風に認識しております。不思議なことに世界どこでもですね、いじめのピークっていうのが小学校 5、6 年に来るといいうのが共通してまして、やはりそういうこ

とが未然に防げた方がいいわけですので、小学校でもこういう取組は、将来的にやっぱり実現するべきだという風に思いますが、まだちょっと世界的にはそこが手探りですので、我々も中高生の取組を進めながら、小学校のお子さんたちに合ったものをまた検討を進めてまいりたいという風に思います。

二つ目ですね、校則についてどう扱うかということで、実は校則というのが重要な課題だという風に私も認識しております、一方でやはりあれもこれも校則について生徒の意見が出てくると、先生方や学校の方としては少しプレッシャーを感じてしまうということも現実にあると思います。ただお子さんたちは、やはり自分たちに関わる環境、まさに校則とはそういうものですので、それが不条理といいますか、ちょっと納得しにくいなということについては、そういう意見をきちんと表明できること、そしてなぜそういうことになっているのかということ、大人も含めて、変えられる変えられないってこともあるんですけども、まずは説明をするってことですね、どうしてこういうことになってきているのかという説明を、皆でしっかりし合うこと、そういうこともすごく大事だと思います。やはり自分に関わるルールを、もし適切に皆で力を合わせて変えていくことができるという経験を持てれば、これは非常に大きい経験だという風に思います。ですので、校則についてもお子さんたちの議論の俎上には必ず上がってくると、そういうものをどういうふうに扱っていくかということは周囲の我々大人が、ちょっとどこまで対応できるかということがチャレンジを受けるといことにはなるかという風に思います。大事なポイントだと思います。

それからそうですね、コーディネーターという名前がいいんじゃないかというお話いただきましたけれども、インドではですね、ミトラっていう名前をつけていて、ミトラ、仲間とかですね、友達っていう意味らしいんですけども、これ外から入っていただいたときに、先生方が決して不適切とかそういうことではなくて、先生方ではない存在なんだっていう、あなたたちの側にいる身近な存在なんだっていうことを示す意味で、ミトラっていう言葉をつけているそうです。先ほど校内ラジオでこの取組をみんなに周知するというのも本当に大事なポイントで、ミトララジオっていうか、そんなことも一つ、そういう皆を巻き込んでいくときに大事になってくるような取組だという風に思います。いずれにしても私達も一定のところで、子供たちがどんな名前がこの大人についていたら親しみやすく呼びやすいのかっていう、これまた子供の意見も聞きながら、東京のこのコーディネーターの名前を決めていってもいいのかもしれないという風に今思っているところでございます。

それからそうですね、コーディネーターの大事なポイントというのは専門性が高いということではありません。大事なことは子供の視点に近いということが優先されます。ただ大事な専門性があるとするれば、子供のやっぱり意見表明をサポートするということですね。それを踏まえた上で、先生たちとしっかりと橋渡しをしていくというこの二つの役割を上手くしていくと、これが結構難しいかもしれませんが、ただインドや他の国でこの取組が非常に注目されておりますのは、高度な専門家を養成しているわけではなくて、フレンドリーなそういう人材を、きちんと一定の研修を、1週間ぐらいなんですけれども、してどんどん

その現場に輩出していくということですね。高い専門性がないと出来ないということにすると誰も入ってこれないんですが、一方できちんと研修を一定程度した上で、フレンドシップというところに重きを置いた存在として入っていただくということが重要になります。ただ、学校の中で1人外から入っていくとかなりアウェイな感じがありますので、大事なポイントは、例えば週3日学校でこういう取組に従事された方々が集まって、週に1回は、他の学校のミトラの取組がどういうところが良くて、うちでどういうところが学べるかっていうことですね、ミトラといいますかコーディネーターのやっぱりその情報共有と連携の機会ということをしっかり保持していくということが非常に重要になってくるということかと思います。

あとそうですね、Agencyのところにも関わりますけれども、これまでの様々な学校での取組というのが、子供に、例えば生きるソーシャルスキルを教えるとかですね、色んな健康についての情報を教えるっていうことを学校でやってきました。これも意味はあったと思うんですけども、ただ、座学で教わったことを実践するっていうところに本当に繋がっているかどうかということが課題でした。今回パテル先生たちがやっていることは、子供たち自身が、自分たちが生徒同士で教え合ったり、生徒同士でこのテーマが大事だっていう風にピックアップして、自分たちでこのワークショップをやったりとか、要するに生徒自身が主体的にこういうテーマについて関与して教え合っていくっていう、その課題を自分たちが主体になって広めていくっていうことをやると、そうすると、凄くそれは経験も踏まえた、生きたスキルになっていくということになります。意見箱の話が出ましたけれども、ご本人さんたちの意見表明ということが非常に大事なのですが、もう一つ大事なことは、自分の居心地の良さということが、他の仲間の居心地の良さにも本当に繋がっているかどうか。皆の色んな居心地の良さが出てくる。そういうときに他の子たちの居心地の良さについて私達が代弁できているのかっていうことについても、よく議論していただくというプロセスがあります。ですから、自分の望みを叶えるということだけではなくて、皆の望みと自分の望みをどう叶えたらいいのかということ、よくチームで熟議してもらって、それでプロポーザルといいますか、変革の提案というものを出してきていただくということになります。そういう風にやっていきますと自然とスキルっていうんでしょうか、コミュニケーションのスキルや生徒同士のその関係をより良くしていく生きたスキルが身に付いていくという風に言われています。そういうことで取組の中で、Agencyも含め必要なスキルや知識というものを子供が主体になって身につけていくということが重要であるということかと思いません。

ちょっと私も話すと沢山になってしまいますので、この辺にさせていただければという風に思いますが、やはり意見表明がチルドレンファーストで非常に重要視されていますが、この学校の取組のデータを見てもそうですね、大事なことは、意見を実現するってことが凄く大事で、意見の実現がないと意見を言わなくなるっていうことですね。ただ意見を表明せよっていう前に、意見が実現していく様子を、やっぱり子供たちに見せていく

ってということが意見表明を引き出すとても大事なことだと思いますので、この取組の中でもそういった実現を一緒に指向するというを大事に見直していければという風に思っております。以上です。

【秋田座長】

ありがとうございます。私の方も、皆様のご発言や西田先生のプレゼンを受けてのご発言等を聞かせていただきながら感じた点でございます。まず一点目は、先ほども言われましたエビデンスベースということです。きっとこういうことはいいだろうなっていう風には皆さん思っているんですけども、それが先ほどのグラフのように、本当にミトラさんとか先生ではない、コーディネーターの人のところだと、こんなに意見箱の投書が多くなるんだっていう、説得性があるって、皆もそうだなって思える。そういう取組の研究をして下さっている、継続的にして下さっていることの意義は大きいと思います。不登校の子供が、東京都もそうですし、国でも本当に増えてきています。その中で特に日本は、今回は小1から小4が特に増えてきているというようなところもございますので、今後そのパイロットから、やはり小中と研究が繋がりながら、考えていただくということが大事だろうと思います。

その中でこの取組は、先ほどから皆様からお話が出ていました、Agencyということを個人に還元するのではなく、関係や環境と共に考えていくという点が大事だと思います。OECDではAgencyはCo-agencyとそれからCollective-agencyという風に呼んでいまして、主体はお互い様で引き出し合うと同時に、それが学校という場でCollective、みんなが生き生きと居心地の良い学校を作るといふようなところに繋がっていくという像をですね、このAgency、Co-agency、Collective-agencyの関係を、まさに東京都では具現化していこうとされているという風に思います。それをぜひ実現をしていっていただくということが重要でしょうし、その中でコーディネーターという人が、さっきもお話がありました高度な専門性よりも逆に小中高生にとって親しみのある方、私はむしろ地域の方で、学校の先生は異動がありますけど、逆に地域でそういうことを支えられるようなコーディネーターの方が子供の声を聞いて生かしていって下さったらいいだろうなっていう風に思いながら、お話を聞かせていただいていたところです。

私は子供にとって安心感、居場所感と集中、没頭っていうのが保育、教育全ての質に大事ということを書いてきたんですが、その子供の居場所感は、実は子供と大人が一緒になって居心地の良さっていうことを作っていくから居場所感というものが子供の中に生まれるんだということを改めて今回意識することが出来ました。そういうわくわくというようなところが、やっぱり居心地が良いことで生まれていく、その居心地の良さということをぜひ、東京都におかれましては、この取組を一層進めて子供たちが安心して学べる学校環境とか社会の環境を作っていっていただけるといいなと思います。ぜひこの取組が、東京都で留まるのではなくって、こういうことが、どの地域やどこでも出来ますよっていうようなことを西田先生始めこの委員の皆様が色んなところで発信して下さい、また繋ぎ手になってい

って下さるといいのかなと考えているというようなところでございます。

本当は皆様にもう一巡ご質問を受けたかったですけれども、皆さん熱意のあるお話をいただきまして、少し二巡は難しくなりましたので、ここで、知事の方からですね、まとめやお声を聞かせていただけたらという風に思いますが、いかがでしょうか。

【小池知事】

はい、ありがとうございます。子供の未来をどうしていくのかという大変重要な会議、色んな大変意義深いコメントをいただいたところでございます。

東京都では、教育現場と研究機関がタッグ組んで、先進的な知見を取り入れて、独自の取組を始めているところですし、また子供たちが大半の時間を過ごす学校でございます。これを確かめながら、その学校の魅力をですね、さらに一層高めていくという必要があるとこのように思います。色々言葉を整理しながら伝え方であるとか、そうですね、コーディネーターと言われる方には、子供は本当のこと言うけど、元々いる学校の先生には言わなくなっちゃったら、逆にどうしようかとかですね、その辺どういう距離感でいくのがいいのか、しかし学びの場であることも事実でございますので、そこをどう確保していくのか色々整理しながら進めていくことが必要だと思います。やっぱり、社会の宝の子供をどうやって磨いていくのか、ここがポイントであることには変わりございませんので、また引き続き皆様方のご意見も伺いながら、進めていきたいと、このように思っております。

今日は本当にありがとうございました。

【秋田座長】

小池知事どうもありがとうございました。本日は長時間、というよりは皆様もっとお話したかったと思うんですけれども、時間も限られておりましたが、お疲れ様でございました。以上をもちまして会議を終了いたしたいと思っております。西田先生、本当に素晴らしいプレゼンテーションをいただきましてありがとうございました。委員の皆様も本当にどうもありがとうございました。